

日本学術会議主催 学術フォーラム

「欧州とアジアの地域紛争をめぐる平和的解決と
世界経済の行方ー学術共同の観点からー」

2023年7月9日

ウクライナ戦争の原因とその他戦争との関係

慶應義塾大学 総合政策学部
教授 廣瀬 陽子

開戦理由

- プーチン大統領の個人的思考（ウクライナに対する勝手な歴史観：ウクライナは独立国家であるべきではない）→しかし、占領や編入は考えていなかったはず
- 欧米に辱めを受けてきたソ連解体後の30年（特に、カラー革命、NATO拡大）。被害妄想が極限に。21年夏には、タカ派のボルトニコフFSB長官、パトルシェフ安全保障会議書記がプーチンに侵攻を進言。
- ウクライナ（軍）を甘くみた。2014年が再現でき、ロシアが歓迎され、ウクライナは簡単に手中に落ちると思った。
- 欧米の結束を想定していなかった。天然資源の威力も過大評価
- 米国は弱いと判断（バイデン大統領、2021年のアフガニスタン撤退の醜態、米軍は介入しないと明言）
- プーチン大統領への間違った情報のインプット（特にFSB第5局より）

ロシアの勢力圏構想

- 「**勢力圏**」 (Sphere of interests) の維持がプーチン・ロシアの外交の根幹

<ロシアの勢力圏>

第一義的には旧ソ連諸国 (近い外国) の領域

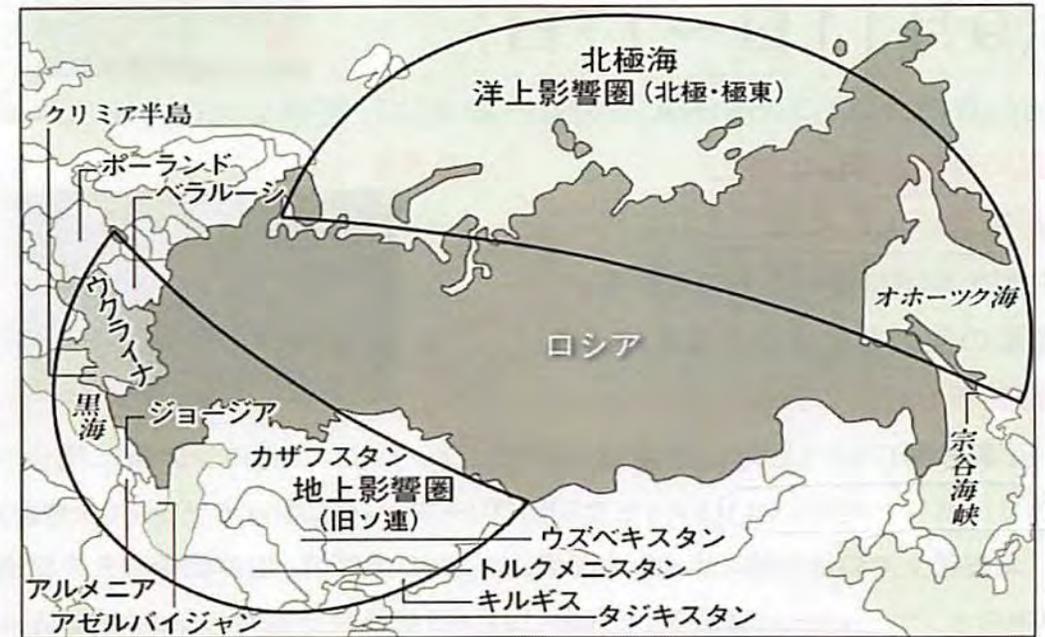
第二義的には旧共産圏と新領域 (北極圏など)

→ **NATO (北大西洋条約機構) 拡大**、EU拡大は許せない (特にNATO)。拡大を阻止するためにハイブリッド戦争が多用されてきた

→ **ウクライナは特に重要**

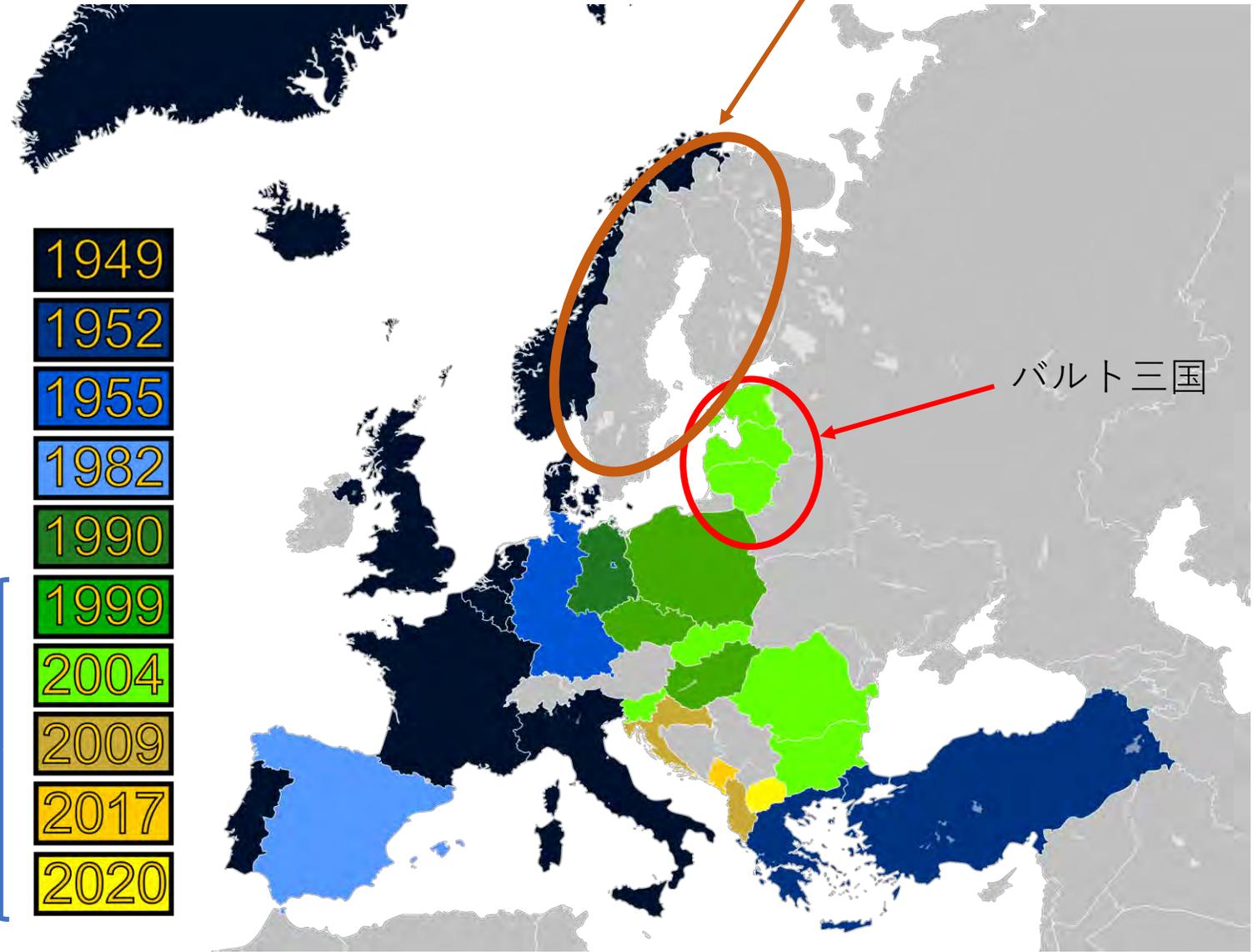
- ①歴史の共有；②民族的近接性 (東スラブ系) ；
- ③ロシアにとっての緩衝地帯；④隣で民主化し、幸せになるウクライナ人をロシア人に見せたくない (抗議行動などの恐れ)

ロシアの影響圏的発想



NATO拡大

フィンランド加盟（4月4日）、スウェーデンもまもなく加盟か？



1999年以降、旧共産圏への拡大
=ロシアにとって許し難い

旧ソ連の多くの紛争の背後にロシア： ロシアを増長させてきたものは？

- 「力による現状変更の試み」への適切な対処ができなかった
 - ✓ 民主主義国は「力で対抗」はできない → 制裁によってロシアを国際的に孤立させ、兵糧攻めにする
 - 制裁は効いたのか？ cf イラン、北朝鮮
- 国際法、国際秩序の限界
 - ✓ 国連決議などで国際的に批判する
 - ロシアに好意的な国も（反欧米気運と表裏一体の部分も）
 - ✓ 国連の決議に拘束力がない & 戦争犯罪を処罰する術もない
- 「悪き前例」と未承認国家

悪しき前例 1

- 1939年 独ソ不可侵条約および同秘密議定書：冬戦争・継続戦争（ウクライナ侵攻と似た構図）の許容、バルト三国・モルドヴァのソ連領有の事実上の黙認
- 1954年 フルシチョフによりクリミアがロシアからウクライナへ割譲（プーチンは憲法違反と主張→「じゃがいも袋のように渡された」）
- 2008年 多くの欧米諸国などによるコソヴォの国家承認
- 2008年 ロシア・ジョージア戦争とロシアによるアブハジア・南オセチアの国家承認（国際社会はほぼ何もせず。2009年からは米国・オバマ政権による「リセット」政策も）
- 2014年 ロシアによるクリミア併合；ウクライナ東部の危機
→ 対露制裁（ロシアは結果的に超克）

悪しき前例 2

- そもそもの「未（非）承認国家」の放置 → 無法地帯の放置。露の外交カードを増やす

→ 法的親国への揺さぶりに効果的だったが、近年、方針が多様化

①従来モデル（法的親国の中の未承認国家という形態を維持し、法的親国を揺さぶる）

②クリミアモデル（ロシアへの直接併合を図るパターン）

③ドンバス・ジョージアモデル（いわゆる「人民共和国」のような間接併合。ドンバスのように②に移行するケースも）

※クリミア、ヘルソン・ザポリージャ両州は未承認国家ですらない状態でロシアに併合

強制力がないことが深刻な【問題】

- 国際法違反や戦争犯罪への強制力ある対抗策がない → 制裁を乗り越えられてしまったらそれまで

→ やったもの勝ちの前例をさらに作ってしまう（これまで悪き前例が多すぎた）

- そもそも、国際法が守られていれば、国際秩序のあり方を問う必要もない

cf 1991年12月21日のアルマ・アタ宣言が守られていれば、旧ソ連のほとんどの戦争・紛争はなかったかもしれない

→ **戦争の構造的な問題を考えなければ、負の連鎖は続きうる**

ご清聴ありがとうございました。